

☒ 話すこと ☒ 書くこと☐ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☐ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☒ 課外活動での活用☐ 家庭学習での活用実践の
ポイント

話すこと[やりとり]技能・書くこと(論理的思考力)を育成するために、AIを添削ツールとしてではなく、対話パートナーとして活用した。

実証概要

<校数> 2校(中学校:1校、高等学校:1校) <人数> 332名(中学校:124名、高等学校:208名)

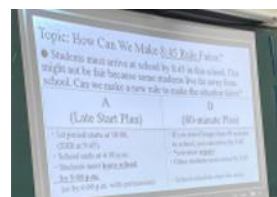
<学年> 中学校:第3学年 高等学校:第2学年 <アプリ等> スクールAI(株式会社みんがく)

<AI機能について> 対話型生成AI。生徒がAIと会話したり、作文をする前に内容をまとめたりすることができる。また、教師画面から生徒のAI活用状況を把握することができ、教師が事前に作成したチャットボット(アプリ)を生徒に配信することもできる。たとえば、語彙の難易度を調整した発話や学習者の発話に対して反論を加えるディスカッションができる。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●やり取りの指導におけるAI活用(中学3年)

「朝8:45にクラス全員がHRを行うのは、(遠方の生徒もいるので)公平と言えないか？」等のペアワークを行なった後に、同じ論題でAIとディスカッションを行う。その後、再度同じペアワークを行い、成長や課題を振り返る。これにより、生徒の困りごとを生徒が言いたい表現をAIと相談し、説得力の高い主張をすることができた。



●論理的な作文能力の育成(高校2年)

「主張—理由—前提」の構造を意識した文章を明示的に指導した上で、AIがライティングチューターの役割を担い、学習者が自律的な書き手となるように、問いかけを通じて思考を整理することを支援する。プレライティングの段階でAIを活用した事例。教師は生徒のプレライティングでの対話を見取り、個別の指導に専念することができる。



実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

やり取りにおいて、1ターンあたりの発話語数やインタラクティブリスニング(付加疑問・引用要約表現)の出現頻度、反論の回数が有意に上昇した(下表)。エッセイライティングにおいて、論理構成のスコアが有意に上昇した($t=3.58$, $df=177$, $p<.01$ (Cohen's $d=0.27$ [効果量:小])).

指標	pre	mid	差分	t	p	Cohen's D
ターン数	4.55	2.29	-2.26	5.06	< .01	0.82
発話語数	49.68	63.26	13.58	-2.62	.013	0.43
平均発話語数	14.08	31.29	17.21	-6.20	< .01	1.01
Interactive Listening	0.21	0.87	0.66	-4.98	< .01	0.81
Counter Argument	1.55	1.18	-0.37	1.87	.070	0.30

②児童生徒の関心・意欲の変化

AIを用いて自身の英語の苦手なところを見つけることができるようになったと答える生徒が事後アンケートで75%みられた。また、「書く力がついた」と感じる生徒が事前では70.5%だったが、事後では84%に増加した。

③教師の指導の変化

AIを用いることで、授業の進行ではなく生徒の様子に目が行き届くようになり、効果的に授業展開できるようになった。また、作文の添削の労力が削減され、授業で目指す力をつけるための個別のケアに時間をかけることができた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●AIを活用した英語教育ワークショップ「AIを活用した英語授業を考える:変わるものと変わらないこと」

82名が参加し、モデル校の教員による実践報告(音読評価AI、リテリングAI、APIを活用した英作文添削、やり取り指導)を行なった。また、大学教員3名による講演・ワークショップを実施した。日常から英語教師自身がAIを活用しながら研鑽し、目標に合わせて授業に取り入れる重要性を共有した。(2025年12月13日実施、会場:福山市立大学小松安弘記念館)



事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

生成AIを会話相手・思考支援者として活用することで、生徒の発話量や論理的表現力、書く活動における構成意識が向上したことを、実際の学習者の発話の量的・質的変容をもとに実証することができた。また、即時的なフィードバックにより、自身の課題を把握し学び方を調整する姿勢が育成された。一方で、AIへの過度な依存や対人コミュニケーションの阻害、思考の省略といった課題も確認された。従来行ってきたとおり、教室において学習者の発話を教室全員で聞き、教師がフィードバックをその都度行うことで、AIの活用方法についても指導をすることができるようになることが期待される。今後は、教師が単元計画時に、AIに委ねる部分と委ねない部分を踏まえて、生徒と目標を共有した上で学習活動を実施するように取り組んでいく。